第１回優秀会社史賞選考委員会報告書

１９７８年7月１１日

優秀会社史賞選考委員会

優秀会社史賞選考委員会

（50音順）

委員長	東京大学教授	中川　敬一郎
委員	法政大学教授	伊牟田　敏充
	日本経済新聞社 論説副主幹	阪口　昭
	経団連図書館調査役	末吉　哲郎
	東北大学教授	大東　英祐
	早稲田大学教授	間　宏
	東京大学教授	山崎　広明
	明治大学教授	由井　常彦
	一橋大学教授	米川　伸一

事務局：財団法人　日本経営史研究所

入　賞　作　品

（５０音順）

優秀会社史賞

大塚製靴百年史

住友信託銀行五十年史

第一法規出版株式会社七十年史

第四銀行百年史

東レ五十年史

創業１００年史　古河鉱業株式会社

三菱鉱業社史

安田保善社とその関係事業史

特　別　賞

荒川林産百年史

渋沢倉庫の八十年(Ⅰ)(Ⅱ)

驀進　日本車輛８０年のあゆみ

日本陶器七十年史

三井銀行１００年のあゆみ

優秀会社史賞　候補作品

1. 麻　生　百　年　史
2. 大阪建物株式会社五十年史
3. 川崎製鉄二十五年史
4. 関西電力二十五年史
5. 紀陽銀行史
6. 山陰合同銀行史
7. 創業１００年史　品川白煉瓦株式会社
8. 十八銀行百年の歩み
9. 中国地方電気事業史（中国電力株式会社）
10. デンカ６０年史　電気化学工業株式会社
11. 東京急行電鉄５０年史
12. 飛島建設社史（上）（下）
13. 日産自動車社史　１９６４～１９７３
14. 百三十年史　日本紙パルプ商事株式会社
15. 野村証券株式会社五十年史
16. 白鶴二百三十年の歩み
17. 阪急百貨店二十五年史
18. 富士電機社史Ⅱ　１９５７～１９７３
19. 北越製紙七十年史
20. 創業百年史　北陸銀行
21. 雪印乳業史　第四巻
22. ライオン歯磨八十年史

特別賞　候補作品

1. 伊那谷の歴史の中に　飯田信用金庫五十周年記念誌
2. 王子製紙山林事業史
3. ここに生まれここに育って五十年　京都信用金庫のあゆみ
   - 別冊・クロニクル
   - コミュニティバンク論　地域社会との融合を求めて
   - 京都庶民生活史
4. 義済堂百年史
5. 三和銀行の歴史
6. シオノギ百年
7. 新宿高野１００年史　創業９０年の歩み(1)(2)
8. 第一銀行小史
9. 創造への年輪　月島機械七十年の歩み
10. 東京瓦斯九十年史
11. 富士山麓史　富士急行株式会社創立五十周年記念出版
12. 創造への挑戦　三井物産１００年のあゆみ
13. 丸　紅　前　史
14. 吉野藤の百年

選考経過ならびに選評

1. 選考の経過

1）選考の対象

優秀会社史の選考対象の範囲は，昭和48年1月以降53年3月までに刊行されたもののうち，日本経営史研究所において入手しえた約430冊とした。なお同所における社史の収集は，専門図書館協議会関東地区協議会経済分科会が作成した「社史・経済団体史総合目録」および同追録1，2によった。

2）選考の手順

発行点数が多いので，第一次選考は経営史研究所において行い，そこで選んだ「候補作品」49点につき選考委員会が入賞作品を決定することとした。

3）第一次選考

社史刊行の意義・目的は多様であるため，第一次選考はつぎのような方針によることとした。

まず，社史のタイプを，①オーソドックスな社史，つまり自社の経営活動を全般にわたって叙述してあり，したがってある程度大部のもの，②対社会的PRや従業員教育を目的とするもので，読ませる工夫がしてあり，出来上りもハンディであるあるもの，および企業の特定部門の歴史をまとめたものなど，企画に特色のあるもの，の二つにわけ，便宜的に前者を「A」，後者を「B」とし，それぞれに該当する作品を選び出すことにした。

経営史研究所は，別に作成したチェックリストを参考にしつつ，「A」を30点，「B」を19点，計49点を「候補作品」として選考委員会に提出し

た。

「候補作品」の提出を受けた選考委員会は，委員がこれを手分けして読み，各社史についてのコメントを持ち寄って全員で検討することとしたが，なかでも特に注目されるべき作品と思われた１４点については，複数の委員で読むこととした。

４）入賞作品の選考

大量の会社史をまとめて審査し，そのなかから優秀な社史を選考するというのは初めての試みであり，まず「よい社史」とはどういう社史なのかを，入賞作品を決定するに先立って議論しておく必要があった。とくに「社史」を，学界の業績として評価するか，企業にとっての効用という点からみるのかという問題が提起された。わが国の場合，社史は企業が自らの責任と負担において刊行されるのが普通であるから，企業の戦力となるような社史こそが望ましい。すなわち，社史はその企業の経営幹部の教育に役立つようなもの，あるいは一般従業員に対するリーダーシップや，真の意味のＰＲに役立ちうるような内容を備えていることが望ましい。その意味から，社史については研究者の研究業績とは少し違った評価が必要であるとの意見が出された。

しかし他方，幹部の教育のための社史という場合，経営の諸問題が正確に書かれていなければ，したがって企業史として科学的水準も高くなければ，その用には立たないのではないか，特に会社が過去に直面した困難な諸問題とそれへの対応が，経営意思決定の過程を中心にして克明に叙述されていなければ，幹部教育の役にはたたないし，逆に，そのような内容をもつた社史は，経営史や社会経済史の研究にとっても稗益するところは大きいから，学会の業績としても評価できるはずである。もちろん企業には，どうしても外部には発表できないような事実もありうるが，しかし，それでもフル・ディスクロージャーの原則にもとづいた客観的な叙述が社史には不可欠であるとの意見もあった。

結局，学界の研究者が多数を占めている選考委員会の性格からいって，記述

が科学的であるという条件は第一義的に重視されざるを得ず，そのことをこの「賞」の特長としたうえで，社史の企業経営における効用という面も十分に考慮するということで，ほぼ意見の一致をみた。

5）入賞作品の決定

「よい社史とは何か」の議論のなかから，「第一回優秀会社史賞」に該当する作品には順位をつけず，入賞作品の数も多くし，「優秀会社史賞」は第一次選考の「A」の部から8点，いま一つ「特別賞」を設けて第一次選考の「B」の部から5点の入賞作品を決定することとした。

2. 選　　評

1）総　　評

一般的にいって，編集，執筆いずれにおいても，本格的な姿勢で取組んだ社史が近年数多く刊行されるようになっており，社史への認識が著しく高まっているように思われる。すなわち，審査対象になった社史の多くが，企業の内部資料を生かし，マーケティング，財務，技術開発，管理組織，労務といった諸機能の発展・変化のあとを克明に叙述し，また会社の経営理念をも明かにしようとしており，基本的な経営資料の整理・蒐録にも努力のあとがうかがわれる。さらに，地域経済との密接な関係や事業の特殊性から来る企業の特色を積極的に追究することによって，企業の歴史的意義を明かにしようとしている社史も少なくない。

しかし，その一方で，たとえば「技術編」「営業編」「労務編」というように，諸機能をそのまま編別構成の基準にし，そうした各論に歴史叙述の多くを送り込んでいるため，本史に当る部分の内容が稀薄になり，会社の基本路線の叙述に迫力を欠く結果になっている社史も少なくない。多くの場合，こうした諸機能は互いに結びついてトップ・マネージメントの課題，経営意思決定の内

容を構成するものであるから，安易に機能別の編別構成に頼ると，会社の発展の決定的過程・経営のダイナミズムは書けなくなる。総じて，どの社史も何もかも余りに多くのことを平板に書き列ねているきらいがあるが，やはり，それぞれの企業について，どの時点の，どの分野に，その企業の発展にとって最もクリティカルな問題があるかを充分見極めたうえで，むしろそうした問題の編別構成を採用するのが望ましく，形式的な時代区分と同様，安易な機能別編別構成もできるだけ避けたほうがよい。

いまひとつ多くの社史に見られる欠陥は，創業期から比較的初期の段階，すなわち多くの場合，第二次大戦前については，分析も行き届いており，叙述もすっきりしているのに，時代が新しくなるに従って，経営史的な突込みも不充分であり，叙述も平板でまとまりが悪いという点である。執筆期間の制約その他さまざまな事情があると思われるが，その際，果して社史はすべて現時点まで筆を進めなければならないものかどうかも，改めて考えてみるべきではなかろうか。外国の社史には，むしろ会社の発展が，言わばひとつの山を越えたといった時点で記述を打切っているものが多く，歴史的評価の定まらない最近の事情まで無理をして記述する必要はないように思われる。その他，各選考委員から出された注文として，原資料を明記すること，必ず巻末索引をつけること，鉱山企業など必要な場合は地図を掲載すること，財務諸表など資料の数字を一貫性のあるものにすることなどがあった。

最後に，総じて銀行の社史に優れたものが多かったが，入賞点数には限りがあったので，この分野については審査が相対的にきびしくならざるを得なかったこと，また学術書としてみれば，きわめて価値が高いが企業戦力としての有用性が殆んど考慮されていないため選に漏れた社史もあることを付記しておく。

2）「優秀会社史賞」

『大塚製靴百年史』ならびに別冊『資料』：同社の日本の製靴産業に果してきた役割や，問屋制経営から近代的大工場経営までの発展の過程や作業組織の

具体的なあり方などがよく書かれている。別冊『資料』をふくめて，ユニークな高い水準の社史である。

『住友信託銀行五十年史』：単独の執筆者により膨大な社内資料を駆使した大部の労作であり，銀行経営史のすぐれた業績である。

『第一法規出版株式会社七十年史』：豊富な資料と丹念な取材により，経営の挫折についても卒直に叙述している。大規模でない企業の社史の一つのよい例である。

『第四銀行百年史』：経営基盤である新潟地方の産業・経済の展開のなかで，自行の１００年の歩みを適確に跡づけている，地方銀行史の秀作である。

『東レ５０年史』：社内のスタッフによって書かれた社史として，ほぼ標準的な編別構成によっているが，それぞれがよくまとめられており，編集の意図を十分に実現している。

古河鉱業株式会社『創業１００年史』：歴史のながい会社に共通した，戦後の記述が手薄であるというマイナス点をおぎなうに足る創業から戦前期までの丹念な実証研究は学術的価値がきわめて高い。

『三菱鉱業史』：史実の正確かつ客観的記述とともに，経営史の方法が的確に意識されたすぐれた企業史である。

『安田保善社とその関係事業史』：従来あきらかにされていなかった安田財閥の活動の全容が一巻の大冊にまとめられた点，財閥研究，銀行史，保険業史の研究に貢献するところの大きい業績である。

３）「特別賞」

『荒川林産百年史』：零細な薬種問屋から工業薬品メーカーへ発展した同社の歴史が，かざらぬ表現で叙述されており，さらに「松脂産業小史」を付している点の努力を買う。

『渋沢倉庫の八十年(I)(II)』：社員教育用の社史とうたったもののなかでは出色である。

『驀進 ── 日本車輛８０年の歩み』：「見せる」社史としての工夫がこらしてあるだけでなく，企業史としてもすぐれた水準のものである。

『日本陶器七十年史』：本格的な編集態勢のもとで，簡潔で読みやすい社史を，豊富な資料や魅力的な口絵とともに編集するために，さまざまな工夫がこらされている。

『三井銀行１００年のあゆみ』：一般の読者を対象として書かれているにもかかわらず，銀行史として高い水準を示している。

Ⅰ．入賞作品選評

〔優秀会社史賞〕

〔特　別　賞〕

【優秀会社史賞】

1. 大塚製靴株式会社大塚製靴百年史編纂委員会『大塚製靴百年史』および同資料　昭和５１年１月刊

関東地方の歴史の古い企業の社史編纂に当っては，震災と戦災の２回の被災と聞きとり調査が不可能なことから，初期の時代について資料不足という困難に直面することが多いと思われる。このことは大塚製靴の場合にもあてはまるが，同社の１００年史の中で精彩のあるのは，最も資料の不足していると思われる手工製靴の時代についての記述である。なぜなら，創業者の性格を「靴師」として把えることにより，日本における製靴産業の発展に果した「大塚」の役割や位置を示しつつ，職場の作業組織の姿までも詳細に描き出すことに成功しているからである。資料の不足は，しばしば"……であったにちがいない"とか"……であったはずである"といった推論の連続――例えば震災前後の合併問題の部分など――を生むことになっているが，一定の判断の根拠を明示したうえで，積極的に推論を展開した態度は，むしろ評価すべきであろう。大塚商店時代については，機械製靴方式への転換に伴う作業組織の再編成が殆んど扱かわれていないこと，大塚製靴株式会社時代については，営業面では民需転換→ファッション産業化という筋道が強く主張されていて，価格競争の側面が充分には扱かわれていないことが気になるが，全体としては質の高い社史であるといえよう。

- Ａ５版７８０ページ（年表５６ページ），資料３６０ページ，索引および，参考文献目録がある。

『大塚製靴百年史』

この成果は，その対象と方法という両面において，さまざまな斬新な狙いを達成した注目に値するものである。対象としては，それが明治初年の問屋制経営に出発して，近代的大工場経営までの歩みを経験した稀有の企業であること。方法においては，経営科学のプロでないライターに依嘱して執筆されたものであること，さらに製靴産業全般に及ぶトピックに約３０％ほどを割いていること，最後に各章がすべて執筆者の名において記述されていることなどである。

総評的に言えば，この書物は多くの珍しい写真にも助けられて製靴業の産業としての特異性を伝えるのに成功しているし，書き方によっては砂をかむが如きになったであろう社史に読者をひきつけるのにも成功している。誠にユニークな企業のユニークな社史ということが出来る。

ただ，これら新しい企画は同時に負の評価とも係わっていることを指摘しておきたい。この経営史的には非常に貴重な企業とその経営資料とを，社史として充分に生かしきっているかと言えば，必ずしもそうは思えない。基本的観点として，企業の創造性よりも環境による規定性の方が表面に出る結果となっている。また，インダストリアル・デザインとかファッションを重視したのは評価したいが，マーケティングの機構と歴史に充分な配慮がなされていないと考えられるのは残念である。

以上２，３この問題を指摘したが，これらは望蜀の感と言うべきかも知れない。文献目録・年表を含めて別巻の資料編を高く評価したい。

2. 住友信託銀行五十年史編纂委員会『住友信託五十年史』および同別巻　昭和51年3月刊

当社史は，(1)本史のみで1300ページをこえ，50年史としては膨大なものであること，(2)補助的作業を除き本文のほとんどすべてが専門研究者といえる一人の社内の編集委員によって執筆されていること，(3)したがってアカデミックな業績として十分に評価に値いする統合性，論理性，実証性をもっていることの3点において，数多く刊行されている社史のなかでも傑出したものになっているといえる。

『三井銀行八十年史』以来，銀行ないし金融機関の社史のなかにはすぐれたものが少くないが，そのなかでも特記すべきものである。また膨大なボリュームに比較して，役員や建物の写真など最少限におさえていることにも敬意を表したい。

全体は，前史，創立から戦前期（信託会社時代），戦後の富士信託時代，貸付信託発足後現在までの4期にわかれ，とくに第一～第三編までは，日本の信託業務の特性の考察から，金銭信託を中心に，信託財産の推移と運用など諸業務が綿密きわまりなく考察，分析しているばかりでなく，そのほか人事，組織，経営方針，業績あるいは住友における役割も丹念に記述されており申分がない。全体からみると，まさに同行が発展した戦後の貸付信託時代（第4編）が簡略化されており，この部分の不十分さは否めないが，むしろ六十年史にまつべきかもしれない。

・B5版1309ページ（別巻222ページ，年表23ページ）索引なし，参考資料注記。

『住友信託銀行五十年史』

住友信託銀行は，さきに『住友信託銀行三十年史』『住友信託銀行史』を刊行しているが，この五十年史は改めて創業以来の歴史を内部史料にもとづいて詳述したものであり，本巻約１３００ページ，別巻（資料・年表・統計）２２２ページの大冊である。銀行史は，１０００ページをこすものが少くないが，そのなかでも本史は大冊のうちに数えられ，詳細さにおいては同業他社の行史を抜いている。本行史は，麻島昭一同行東京調査部長（当時）の単独執筆によるものであるが，①社内資料による客観的叙述，②業務の展開を金融市場・信託行政・住友財閥など外部環境の推移と密接に関連させて記述，③社史の重点を同行の経営史に置き，重要問題にスポットをあてている，④学問的批判に耐えうるような，金融史・経営史の研究水準に立つ，⑤適宜に写真，エピソードを入れ，読みやすさにも配慮がある，⑥資料・統計も，現在の経営史研究上稗益されるような具体的なものが掲げられているなどの特徴を持ち，単独執筆による独善性はみられない。

原資料で示される様相は，当時の経営陣の苦闘をビビッドに再現しており，住友財閥内における同行の役割も数値によって明示され，同業他行との経営比較によって経営成果が客観的に述べられている。また，同行の経営戦略の展開もよく理解できる。単にページ数のうえだけでなく，内容において「労作」の名に値いする社史といってよい。

3. 第一法規出版株式会社七十年史編集委員会編『第一法規出版株式会社七十年史』昭和48年9月刊。

この出版社は，長野県のある村役場の吏員が法律規則に精通していなければならなかったという必要性から，これを加除式の法令書として公刊することに着目し，明治36年「令省社」として発足した。本社史は，まず創業の起源から興味深く書き起す。そして，経済社会の変遷・激動と出版業界の盛衰の中で，この会社がユニークな出版活動を続けて来たことを，豊富な資料とゆきとどいた談話取材によって浮き彫りにしている。

本書のあとがきに，「社史というものはそこにいる社員のすべてが読むのでなければ大半の意味を失ってしまう」ので，事実を極力なまのまま，しかも読みやすく記述するよう心掛けたとあるけれども，ただ読みやすいだけでなく，文章に格調があり，分析においてもすぐれたものがある。このことは執筆者の，自社史を書く情熱にかかわっていることなのかもしれない。

本書は，出版社の社史としては従来のものとはちがったタイプをつくり出しているだけでなく，それほど大規模でない会社の社史のよい例を示すものとしても高く評価できる。

・B5版588ページ（年表104ページ），索引なし，参考文献目録あり。

『第一法規出版株式会社七十年史』

出版業は，歴史の古い有力な会社が少くないので，これまでに刊行された社史も決して乏しくない。しかし，法律書の分野で有数な企業である本社史は，従来の多分に創業者伝記あるいは発行図書目録を中心とした類書とちがって，さかのぼって明治３６年「令省社」なる一小法規出版社の創立から，昭和４８年にいたる七十年の歴史を，事実に即して，いわゆるなまの姿で描き出した点で出色といえる。

創業者や歴代経営者の政策や判断，スタッフの活動が，多種多様な苦労や試行錯誤，失敗をあわせて叙述されており，かつ経営上の諸資料や回顧談も十分にとり入れられている。年表その他の体裁をふくめて，出版業の経営史としておそらく今後のモデルとなりうるものといえよう。惜しむらくは，出版業界全体についての十分な業界史がないという事情もあって，背景となる出版業全体の動向についての記述が乏しいことが，本書をやや軽便なものにしていることは否めない。しかし，これは大きな欠点とはいえまい。

4. 第四銀行企画部行史編集室編『第四銀行百年史』昭和49年5月刊

第四銀行は，新潟県に本拠を置く，明治6年創立の地方銀行である。同行は，明治5年の国立銀行条例によって設立された，わが国最初の4行のうちのひとつであり，大地主が創立者であることもあって，日本経済史上著名な存在である。同行百年史は，総ページ数約1000ページで，本編（第四銀行とその前身史），合併銀行編（第四銀行に直接・間接に合併された銀行の小史），付編（定款・役員・財務諸表・年表）よりなる大冊である。同史編纂の方針は「あとがき」にみられるように，①日本経済・金融および新潟県経済・金融の発展とからませつつ第四銀行の役割を浮き彫りにする，②経営の理念と特質を明らかにする，③合併銀行の歴史も史料収集につとめ，叙述する，という3点にあって，これらの点は加藤俊彦東大教授（当時）の監修を得て，かなり実現されている。同行所蔵史料のみでなく，広く渉猟された史料により，営業に関する計数，経営政策（とくに店舗政策・東京支店の資金運用政策）・役員および主要株主の系譜など詳細に述べられている。本編の冒頭の序論で，第四銀行の経営的特質を要約して示し，「余録」として随所にエピソードを入れているが，読みやすくするための工夫といえよう。農業県に立地しながら商業金融を主とし，東京支店の役割が大きかったこと，有価証券担保金融の比重が大きいことなど，金融史的に注目される事実を紹介しており，水準は高い。

・B5判986ページ（年表38ページ），索引・参考文献目録なし。

『第四銀行百年史』

本書は，的確な時期区分にもとづいて第四銀行１００年の歩みを，新潟地方経済の展開と関連づけて記述したオーソドックスな地方銀行史である。近年，地方銀行史においても，地方経済，地方産業と関連させて銀行の歴史を記述することが一般的になってきたが，経済・産業の記述と銀行の記述とが単に並列されるだけに終るケースが多かったことからすると，本書はこの両者の関連づけにほぼ成功したものとして評価できる。これは１００年という長い時期の区分が，日本経済の近代化・工業化の歴史に即して的確に行なわれたことと，銀行の資金調達源泉と，その運用先をできる限り詳細に追究して，新潟と東京との資金の交流と新潟県内における資金循環の中に地方銀行を位置づけるという分析・叙述の方法が，意識的に採用されたことによるものであろう。

歴代頭取の経営方針や，被合併銀行の歴史についての詳細な記述も地方銀行史の今後のあり方を示唆している。

監修者も指摘しているように，日本有数の農業県に立地しながら，当行が当初から商業金融に業務の中心をおいていたというファクト・ファインディングや新潟と東京との資金交流関係の分析は，日本経済史や金融史の専門研究者にも重要な問題を提起している。銀行史編纂の過程で収集された資料が永久に保存され研究者の利用に供されることを望みたい。なお，同行はすでに『八十年史』も刊行している。

5. 東レ株式会社社史編纂委員会『東レ５０年史』昭和５２年６月刊。

本書編纂の基本方針は「当社半世紀における経営上の諸事実に立脚して，全体の流れを掌握するとともに，それを構成する主要な部分について客観的に叙述」するとともに「国際経済・日本経済・化繊産業の推移・変遷との係わりのもとで，当社がどのように事業を展開してきたかを明らかにする」ことであり，この方針に沿って「沿革編および経営の各職能別活動を記述した各論編」の二つの部分が，いずれも編年体にとりまとめられている。

沿革編は，以前刊行した『東洋レーヨン社史』の記述を圧縮するとともに，その後の資料を追加して５０年間の同社の歴史を，レーヨン，ナイロン，ポリエステルの企業化，海外事業の拡大，プラスチックへの多角化，原料遡及といったテーマを中心に巧みにまとめている。それぞれの時期における経営戦略の展開が基本線になっていることが，この部分を読み易くしているといえる。これに対して，各論編は経営管理，研究・技術開発，生産，販売，関係会社という５つの柱について同社の歴史を記述している。経営諸事実を正確に把握し，全体の流れを客観的に記述するという方針を忠実に踏襲した執筆姿勢がにじみ出ている。

全体として優れた社史として推薦できるが，戦争直後における三井物産の解体が同社に与えた打撃と，それへの対応策がほとんど触れられていないことが惜しまれる。また，散見される叙述の重複は，沿革編と各論編を総合した記述の方が，より合理的であることを示唆しているのでなかろうか。

・Ｂ５判５４２ページ（年表２１ページ），索引・参考文献目録なし。

『東レ50年史』

東レは，さきに25年史，35年史を刊行しており，それらの上に立って今回の『五十年史』が発刊された。この場合，35年史のあとをうけてその後の15年を中心に扱うのではなく，あくまでも，50年間の通史を目指して執筆されている。執筆は，外部の学者の監修を受けているが，その人の経歴から推測して，その影響は小さく，ほぼ全面的に社内の編纂委員の手によってなされたと判断される。

全体の構成は，沿革編と各論編とに大きく二分されている。沿革編は，同社にとって重要と思われる時期区分に従って，創業前史を内容とする序章から，激変する環境への対応を内容とする第九章まで全10章に分けて同社の歴史的発展過程が，かなり克明に画かれている。各論編は，経営管理，研究技術開発，生産，販売，関係会社のように，経営活動の諸分野ごとに現状を中心にし，それに若干の歴史的経過を加えながら記述されている。

この社史の特徴は，編集方針が，(1)その目的を厳しい経営環境に際会して，将来への指針を求める，(2)その内容は諸事実を忠実に記録する，のように明確であり，ほぼその方針は出来上った社史において満たされていることにある。その方針に明らかなように，この社史は，社内の人びとを対象とし，将来にわたって役立つという長所をもつ。若干の難点は，外社会との関連や人や組織に関する叙述が乏しいか，または形式的なものに止まっている点である。

6. 古河鉱業株式会社創業１００年史編纂委員会編『創業１００年史』昭和51年３月刊。

会社の責任において編集されたことが強調されているが，実際には日本経営史研究所に編集・製作が委託され，執筆は複数の専門研究者に全面的に依存したと思われる。したがって，史実に忠実な学術的価値のきわめて高い内容をもった社史である。

この社史の構成は，多くの社史にみられるのと同じく，年代を追って，第１編古河家経営時代，第２編古河鉱業の設立とその展開，第３編戦時経済下の経営，第４編戦後の経営となっており，それに資料と年表が付け加えられている。本文全体のバランスからみて，第２次大戦後についての記述，すなわち第４編のそれが少ない。そのため，戦後の記述は，戦前のそれに比べて精彩を欠いている。

社史編纂上の基本方針は，必ずしも明確でないが，社長のまえがき（「創業１００年史刊行に当って」）によれば，社内的には「史実の教える事業精神を感得し，当社経営の道標とする」こと，社外的には「社業への理解を深めてもらう」ことにあったといえる。こうした方針あるいは目的を達成する上では，本書は学術的過ぎて，必ずしも適切ではない。しかし，時代や大衆に迎合的な社史ではなく，客観性に富み，貴重な資料が随所にちりばめられており，後世に残る社史の一つとなろう。

・Ｂ５判８０６ページ（年表２０ページ）索引・参考文献目録なし。

『創業１００年史』古河鉱業株式会社

１００年史ではあるが本書の特色は，創業から第２次大戦に至る，言ってみれば通常の平凡な社史なら比較的あっさりと記述する部分を，きわめて丹念かつ無駄なく記述した点にあると言えよう。特に明治期を中心として，ひとつひとつの鉱山の作業・経営方法が執拗に記されている点は特記に価するものであり，学術的価値のきわめて高いものと言うべきである。古川商事の破綻など，重要な失敗についての記述が物足りない点もあるが，これを補って余りあるものと言えよう。

これに対して戦後復興期以降の記述は，きわめて網羅的形式的であって魅力に乏しいものである。

本書の水準の高さから考えると，索引と資料・参考文献目録が欠落していることが大変惜しまれる。

7. 三菱鉱業セメント株式会社総務部社史編纂室編『三菱鉱業社史』　昭和51年6月刊

社外の経営史の専門家と社内の権威者に全面的に依存してまとめられた，学術的価値の高い社史の代表的なものの一つである。

社史執筆上の留意点として，史実の正確，客観的な記述，特に情勢変化に応じた会社の経営施策と意思決定の過程を辿ることが考えられていたことに示されている通り，この社史には経営史の方法が明確に意識されている。構成は，時代を忠実に追った三つの編，すなわち第1編創業より三菱鉱業設立まで，第2編三菱鉱業設立より金属部門分離まで，第3編金属部門分離より三菱セメント等との合併まで，から成り立っている。本文952ページに達する大著ではあるが，事業所数が多く，またその変遷が激しかったため，部分的にみれば掘り下げが足りない感じを与えるのは，やむをえないことであろう。

あとがきの中に，「単に会社の歴史を記録したにとどまらず，社内の執務用，教育用その他に活用を，また石炭業界，非鉄金属業界，更には学界の貴重な資料となることを期待してやまない」という一文が見られるが，その期待の後半は十分満たされる内容をもっている。一般の人にとって，面白く読めるという種類の社史ではないが，斜陽産業である鉱業の立場を考えれば，社史をもって社内の従業員大衆を鼓舞する役割や，社外の大衆に対して積極的に働きかける役割は，そう強く期待されていないのであろう。ごく少数の関心をもつ人にのみ読まれるに止まるかもしれないが後世に残る内容の社史である。

・B5判1063ページ（資料81ページ年表23ページ）　索引なし。

『三菱鉱業社史』

本書は，ディメリットを指摘するのが難かしい。言わば，よい意味のプロの手に成る成果であると言うことができる。

無駄のない筆致でバランスよく当社の歩みが描かれており，戦後と締めくくりの部分も，それなりによくまとまっている。多くの社史に見られるような記述上の一貫性の欠落とか，出来・不出来のないのが第一の評価点であるが，さらに技術進歩も含めて現業分野の作業過程が略図によって，しろうとにも分るように詳述されているのは大きなメリットである。さらに，地図をそえたらもっとよかったと思う。統計も，他の社史と比較すれば精緻をきわめている。全体としてfuuctional approach を重視して，それで一貫した記述にしようとした努力が認められる。

総合点からみれば，最高級の部類に入ることを認めなければならない。

8. 安田不動産株式会社安田保善社とその関係事業史編集委員会編『安田保善社とその関係事業史』 昭和49年6月刊

本書は，いわゆる安田財閥の歴史を，本社＝持株会社たる安田保善社の活動を中心に記述したものである。14年の歳月をかけ，旧安田財閥系関係企業群の組織をあげて資料を収集し，八千数百ページ余に及ぶ第一次原稿を一人の執筆者が新しく書き直して作られただけに，豊富な資料を駆使しつつ，しかも対象全体への目配りや論旨の展開が一貫して優れた社史となっている。

安田家もしくは安田保善社が関係（設立）した事業や企業のそれぞれについて，救済の経緯，設立事情，その後の推移が正確に記述され，これら関係企業の増加を通じて生成・発展する旧安田財閥の組織の展開にも多くのページがさかれている。

従来門外不出だった保善社規約の公開や，本文末尾に収められた「関係行社に対する指導管理体制の実態」，さらには安田保善の解散経過などは財閥史研究に新たな資料を提出するものであり，関係事業についての上述のような正確な歴史記述の銀行史・保険業史研究への貢献と相まって，本書の価値を高めるものとなっている。

また本書は，単なる企業史にとどまらず，いわゆる企業集団の歴史記述のパイオニア・ワークとしての価値をも有している。本書の編纂のために払われた関係者の多大な努力に敬意を表するとともに，その基礎となった諸資料や第一次原稿が研究者に公開されることを望みたい。

・B5判1000ページ（年表36ページ），索引なし，参考文献目録あり。

『安田保善社とその関係事業史』

この書物は，いろいろな点で他の社史に見られない特色を有している。第一に，過去の企業集団の総括史とでも言うべきものであり，安田財閥の解体によって，その巻が閉じられている。したがって第二に，企業の社史ではなく企業集団のそれである。これが企業集団内部の人たちによって，研究者の助力なしに実に15年の歳月を経て編まれたと言うことは，付言に値するものと言えよう。周知のように，安田財閥は多くの企業への金融的マージナル・コミットメントから次第に形成されており，きわめて輪がくの捉え難いものであった。それを，ともかく1巻の書物にまとめたことは，評価されてよいものである。しかも，第1回稿本の本文24巻，第2回の稿本12巻を経て本書が生まれた。第三に，本書は全巻にわたって編集方針に一貫性が見られ，記述にむらがない。これは，記述が昭和25年をもって終っており，最もむずかしい戦後が含まれていない点とも関係があるかも知れない。巻末の詳細な関係文献目録は付記に価する。

若干の問題点として，第一に本書がどの程度オリジナルな資料に依存しているのか，経営文書についての記録がないのではかりかねる。第二に，これと無関係でないであろうが統計・図表の類がきわめて少ない。また企業者の動機とか，意思決定過程に対する関心も必ずしも高くない。しかし，これら問題点にもかかわらず，結論として本書は今回対象となった社史の成果としては，第1級かつ屈指のものであると言える。

【特別賞】

1. 荒川林産化学工業株式会社社史編さん室編『荒川林産百年史』昭和52年4月刊

荒川林産化学工業（現荒川化学）は，松脂（ロジン）関連製品のトップメーカーである。同社の前身は，初代荒川政七が安政3年大阪の薬種問屋の別家（脇店）として伏見町に開業した「玉屋」であるが，のち明治9年に「荒川政七商店」と改めた時を創業としている。もっとも明治時代，多分に伝統的な小規模の問屋にすぎず，「松脂の荒川」として業界に知られるのは，4代目店主として荒川正太郎が家業を継いで，ガム，テレビン油を製造するようになった大正4年以降のことである。昭和6年には合資会社とし，18年には荒川林産化学工業と社名も変えた。戦後昭和29年には，ロジンの最大の市場である製紙業に向けてサイズ剤を発売，工業薬品メーカーとして発展を遂げるにいたっている。

本社史は，大阪道修町の薬品取引業者の一商店から，上記のような特色あるメーカーに発展した歴史を，代々の荒川家の当主とその家族の企業家としての努力を軸に，読みやすくまとめている。また一般には，なじみのないこの業界を理解させるための説明も適切であるだけでなく，ことに明治末期から大正時代にかけての道修町の，しかも有力業者とはいえない商店の経営のさまざまな苦労が，2代社長菊次郎の回想をもとに描かれている。さらに「日本松脂産業小史」にも83ページが割かれていることは，一塊の松脂も産出しなくなったわが国の産業史にとって意義あることと思われる。

・A5判492ページ（年表28ページ），索引・参考文献目録なし。

2. 渋沢倉庫株式会社社史編纂委員会編『渋沢倉庫の８０年』（上・下）
昭和５２年３月刊

渋沢倉庫では，昭和３４年にも六十年史を刊行しており，社史の刊行には比較的熱心なほうであろう。しかも六十年史が，どちらかといえばオーソドックスな社史であったことを踏まえ，８０年史では社員教育用の“読ませる”社史を作ることを当初から目的としていた。「“社史は読むものでなく，積んでおくもの”という今までの概念に挑戦してみたかった」と執筆者自ら述べているとおりである。そして，そういうものとして読めば，この社史はなかなかよく目的を達成している。さまざまのエピソード――日本の世相史のようなものから，会社の内部の事件，経営者の意思決定のプロセスにいたるまで数々のエピソードを綴り合わせ，多少講談風の語り口でまとめあげた手法は，なかなかのものである。おそらくは，こうした手法のせいであろうが，執筆者の体験，登場人物の生まの体験の盛り込める戦後の歴史になると，ますますビビッドな表現がなされ，スペースも過半が戦後の３０年にあてられている。必ずしも順風満帆とはいいがたく，とくに再三，株の買占めで危機に直面した同社の経営を内部からの眼で描き上げた勇気は評価したい。

しかし，やはり社史である以上，基礎的な資料や統計は本文の理解を深め，客観的評価を与える意味で収録してほしかった。社員教育上も，もう少し分析的な視角をもったほうがよいのではなかろうか。

，Ａ５判７５５ページ（年表２６ページ），索引なし。

3. 日本車輛製造株式会社編『驀進 — 日本車輛80年の歩み —』昭和52年5月刊

日本車輛は，名古屋において明治29年に創立された鉄道車両メーカーで，同業界においてリーダーの地位にある企業である。この社史は資料も含め462ページで，決して最近の社史として大冊のうちに入るものではない。しかし，本文は横組み2段とし，活字が他社史より小さいので，内容的には倍近くのものが盛り込まれている。特徴としては，同社の主要製品である機関車・客車・貨車・電車・自動車などの写真がカラーも含めて極めて多数収められており，鉄道マニアならずとも見て楽しい点をまず挙げねばならない。往時の交通事情もうかがえ，工場配置図なども生産の発展を示すものとして興味深い。次に，車両業界の動向も理解できる点もメリットであろう。

また，経営の諸側面についてもかなり詳細で，創立期以降の資金調達事情，役員の交替，他社の合併と系列化，昭和初期の自動車製造への進出，戦後の経営計画と製品の多角化など，重要なポイントが生き生きと書かれている。ただし，貸借対照表・損益計算書など経営の内容と発展を計数的に表示する資料が十分に収録されていず，技術史的な記述が手薄なのが惜しまれる。同社史からうかがわれる史料保存状態は良好のようなので，もっと史料を原型に近い形で利用・採録すれば学術的にも価値を増したのではなかろうか。

・A4判462ページ（年表40ページ），索引なし。

4. 日本陶器７０年史編集委員会編『日本陶器７０年史』昭和４９年１２月刊

この社史の編纂に当っては，社長を委員長，全役員を常任委員とし，その下に専任の社史編集室を置くという全社的な編纂体制が敷かれ，そのうえで電通名古屋支店に企画・製作を依頼するという，きわめて組織だった編集体制がとられている。しかも，最初は６０年史刊行の予定で発足したものが，諸般の事情から７０年史として刊行される運びとなったため，編集期間は十余年にわたる。この編集期間の長さは，出来栄えからみて無駄であったとは思えない。

書式上は，口絵に相当する部分，本文の第一部総合史，第二部明治以降におけるわが国陶磁器・研削砥石工業の発展，それに資料の三つの部分から成るが，相対的にいって本文の部分が短く，口絵と資料の部分が長いという特徴をもつ。これらの部分は，ただ長いだけでなく，そこに多くの工夫が凝らされている。口絵はきわめて魅力的であり，資料は詳細で有益である。本文は，全体のページ数が短いこともあって記述そのものは詳細でないが，きわめて簡潔であり，第一部については九つの編から成るが，それぞれが問題ごとにこまかく章節に区切られており，また各編の冒頭に，はしがきが付けられ，内容がそこに要約されている。無味乾燥になりがちな諸資料は，本文からはずして資料の部に集約されている。

全体としてセンスに溢れ，企業の内外の人びとにとって読み易く，かつ有益な社史である。

・Ａ４判６２３ページ（年表３１ページ），索引・参考文献目録なし。

5. 三井銀行１００年のあゆみ編纂委員会発行『三井銀行１００年の歩み』昭和５１年７月刊

わが国で明治以降の五大銀行の中心的存在として活躍した三井銀行の歴史を，限られた紙幅のなかで，良心的かつ学術的に記した考え得る最良に近い社史であると思う。

記述は，読者の好奇心におもねるところがなく，むしろきわめてアカデミックで水準の高いものであるが，だからと言って決して退屈させない。成功よりも，むしろ時に見られた経営上の問題点がかくすことなく指摘されている点も付言に値する。短かい引用文章でも出典を明記するなど，学術的にも価値あるものである。

これに対して，マイナス点と考えられるものは，第一に，すでに『三井銀行八十年史』のような斯界で名声の高い業績が存在していること，第二に，それと無関係でないであろうが，最近の２０年間の記述が相対的に必ずしも秀れているとは言えないことである。ここでは，思い切って捨取選択をして重点主義でいくべきであったのに網羅的に過ぎ，かつ企業環境（日本経済）の記述に紙幅を与えすぎたと思われる。

・Ｂ５判変型３３７ページ（年表２２ページ），索引なし。

Ⅱ. 候補作品選評

〔優秀社史賞候補〕

〔特別賞候補〕

1. 麻生セメント株式会社麻生百年史編纂委員会編『麻生百年史』 昭和50年7月刊

本書は，多彩な内容を盛り込んだユニークな社史である。導入部の「図説・麻生」から「古文書」（麻生家文書），「麻生の百年」，「語る」（麻生太賀吉，太郎），「家系と日記」，「百年百話」と続き，さらに寄稿や座談会，資料，年表が収められている。これは「当社の事績のみを追う記述はつとめてこれを避け，当社の基盤を生み，当社の成長を大きく包んでくれた『筑豊』全体の歴史をひろく採り入れ，敢えて言えば筑豊百年史の側面をも浮き彫りにする」という編集方針に基いたものであろう。同地の名門麻生家の事業史としては自然な編集方針ともいえる。

これらのうち中核をなすのは「麻生の百年」であるが，麻生賀郎，太吉，太賀吉，太郎といった4代にわたる経営者の動きに即して物語風に記述されている。本文は読みやすく，麻生の100年の歴史の概観が一読して把めるが，それなりの問題点も生じている。とくに，第4章までの太吉時代については既刊の個人伝記に大きく依存しており，それを超える内容に乏しい。また，戦後のエネルギー革命の過程における活動については，地域を超えた次元での経済的・政策的な諸問題との追求をすべきであったと思われる。

この他にも，いくつかの点で物足りなさが感じられるが，全体としては努力と苦心のあとがみられる異色の社史といえよう。なお，豊富な資料が残されているのであるから，それらを駆使して経営体としての麻生の歴史を正確に記述されることを今後に期待したい。

・B5判1563ページ（年表48ページ），索引なし，参考文献目録あり。

2. 大阪建物株式会社発行『大阪建物株式会社５０年史』昭和５２年１２月刊

大正１２年，大阪商船は本社社屋を兼ねた巨大貸ビルを計画したが，これを同社と人的関係の深い宇治川電気および日本電力の３社共同出資の別会社とすることとなって発足したのが株式会社大阪ビルヂング（昭和２０年現社名に改称）である。今日も，大阪・中之島と東京・日比谷に格調ある姿を誇っている「大阪ビル」の家主というわけである。

本社史は，体裁も内容も手軽に読めるように工夫されている。たとえばコラム風にして風俗や歴史，エピソード，談話などをたくさん織り込み，写真もかなり豊富できれいである。沿革編では，当時の経済的・社会的背景，貸ビル業の状況などを述べながら同社の発展を位置づけているが，さらに営業編・土地建物・経営資本編・組織及制度編・営業所編・経理編・関係会社編と，機能別にこまかく分けて叙述しているので，ひとつの会社の歴史の本としての一貫した印象が薄れるようにおもわれる。

なお編集後記で，昭和３０年代後半以降の記述は，当事者が現役として生存しており，公表をはばかる事項もあるため，これらは次の社史に期待したいと率直にことわってある。これも「社史」としての，ひとつの行き方なのかもしれない。よくまとめられた佳作である。

- Ｂ５判５５０ページ（年表２３ページ，付属資料７７ページ），索引・参考文献目録なし。

3. 川崎製鉄株式会社社史編集委員会編『川崎製鉄二十五年史』 昭和51年4月刊

この社史は，すべて社内のスタッフによって執筆されている。全体をⅠ沿革，Ⅱ生産と技術，Ⅲ管理と販売の3篇に分け，沿革では，川崎造船所の製鉄部門としての発足から川崎重工業となり，戦後分離独立するまでの同社の前史から書きおこし，鉄鋼産業の動向を背景として同社の歴史を述べている。そして，ⅡとⅢでは各部門ごとの流れを追っている。こういう構成は，社内で執筆された社史に見られるもっともスタンダードなタイプであり，社内で利用するのにはきわめて便利であろうと思われる。しかし，一般にこういう構成をとっている社史には「必要」なことはおよそ記述されているが，「十分」性に欠け，全体として突っ込みの浅い平板なものになりがちな恨みがある。

川崎製鉄の社史の読者にとっては，同社の発展のエンジンになった西山構想——貿易立国，重工業中心論にもとづいた一貫体制 —— の内容とそれが実現に至るまでの曲折についてはもっと充実した内容を期待するであろうし，環境問題への取組みについても同様であろう。

巻末に資料とくわしい年表，そして使いやすさを配慮して索引が付してある点がよい。

・B5判875ページ。

4. 関西電力株式会社二十五年史編集委員会編『関西電力二十五年史』 昭和53年3月刊

本社史は，九電力体制が成立するまでの関西地方電気産業の展開を，日本の電気産業史の中に位置づけた「創立前史」と，昭和26年の創立以降現在に至る関西電力25年の歴史を記述した「関西電力二十五年史」の二つの部分から構成されている。「当社の事業活動，技術革新の実績を経営史的観点に立って客観的・実証的に記録し，評価する」とともに，「電気事業の草創期から，その発展の過程と当社の生い立ちを，史実に基づいて明らかにする」という編集方針によるものである。

このうち「前史」は，既存の電気産業の通史や各電力会社の社史を総合した要領のよい要約となっており，読者に関電の生い立った背景を伝えるという目的は十分に果たしている。ただし，せっかく電力会社が戦前の自らの歴史を顧りみようとしたのであるから，関西系有力電力会社についての，まさに経営史的アプローチを試みることはできなかったのであろうか。

「二十五年史」では，昭和20年代，30年代，40年代前半，同後半の4期に分けて，同社首脳の経営方針，電源開発，原子力発電，電力流通設備，経営成果等が記述され，エネルギー革命，電力需要の急増，環境問題・資源問題の登場といった内外環境の激変に，同社が主体的に対応して行った足跡が鋭く，かつ分かり易い筆致で描かれている。金融問題の取上げ方がやや弱いこと，労務問題のうち労働者構成や賃金についての資料に乏しいことが惜しまれる。

・A4判621ページ（付属資料85ページ，年表51ページ），索引なし，参考文献目録あり。

5. 紀陽銀行行史編纂室編『紀陽銀行史』 昭和５０年４月刊

紀陽銀行は，明治２８年に第四十三国立銀行の子会社，紀陽貯蓄銀行として設立されたが，しだいに独立して大正１１年には普通銀行に転換する。戦中の銀行合同では県内諸行を合併・買収し，ついに昭和２０年，和歌山県唯一の本店銀行となった。元貯蓄銀行が，一県一行主義の中心として生き残った例は他にない。こうした特異な銀行合同が，なぜ和歌山県に起ったかを，この社史は明らかにしてくれる。県内最有力銀行であった四十三銀行の破綻，有力県外銀行の進出，県立銀行構想の挫折，大蔵省の合併慫慂にたいする銀行経営陣の対応，その間における県当局の意向など，和歌山県における銀行合同のありかたを制約した諸要因が，かなり詳細に叙述されている。基本史料も収録されており，地方新聞の記事，関係者の談話なども織り込まれて興味を盛りあげている。

しかし，肝心の貯蓄銀行いらいの紀陽銀行の業務については，内部資料に基く叙述が弱く，貸出先，貸出金担保，預け金運用先などが示されていない。貯蓄銀行の場合，預け金が資金運用の重要な部分を占めるのであるから，この点の計数はぜひとも明らかにしてほしかった。計数的な分析が乏しいことは，研究者にとって不満を残すばかりでなく，本社史の全体の印象を薄めることになっていて残念である。

・Ｂ５判590ページ(年表51ページ)，索引なし，主要文献・資料目録あり。

6. 山陰合同銀行行史編纂室編『山陰合同銀行史』 昭和48年12月刊

当行は，昭和16年7月島根・鳥取両県の地元銀行たる松江銀行・米子銀行が合併し，さらに石州・矢上・山陰貯蓄の3行を吸収した文字どおり山陰地方の唯一の地方銀行である。同行は，津和野士族の出資になる第五十三国立銀行，同じく松江士族の出資による七十九国立銀行，鳥取の第八十二国立銀行など，源をたどれば，明治11年の山陰地方の国立銀行に辿りつくし，また明治30年の鳥取・島根の農工銀行も関係している。それら前身の銀行は40行に上っている。

したがって本史は，山陰地方の農業，商工業など諸産業の発展を背景として，これら諸銀行の発展と山陰の金融史が概説風に描かれており（第1部），つぎに松江銀行以下主要な銀行の沿革が述べられ，後半において昭和16年設立以後の山陰合同銀行の活動と業績が記されている。ここでも戦後の山陰の産業の趨勢が背景として述べられている。

本史は，従来閑却されがちであった山陰地方の産業発展を背景とした銀行史・金融史として非常に興味があるし，同地方の戦前の地主の一覧や，戦後の工業開発の実状を立入って述べるなど特色あるものである。しかし，前身をなす戦前の諸銀行の沿革が，ごく表面的な簡単な記述にとどまり，ほとんど実態が把握できないことは何としても残念である。

・B5判634ページ（年表48ページ，付属資料117ページ），索引なし，参考文献目録あり。

7. 品川白煉瓦株式会社社史編纂室編『創業１００年史』昭和51年12月刊

「当社の１００年史は又我国耐火煉瓦史でもあらねばならぬ」と自負する品川白煉瓦にとっては，程なく青木均一をむかえて急速な立直りに成功したとはいえ，「当社は初代西村社長亡きあと，好況に恵まれて工場をふやしたが，技術が停滞する時期が続いた」と書くのはつらいことにちがいない。しかし，社史の質は，このような態度がどれだけ持てるかによって決まるといっても過言ではあるまい。「１００年の歩み」＝総論，「育て上げた力」＝専門史と現況，「力を合わせた人々」＝代理店など，「資料は語る」＝資料という構成は地味ではあるが，総論で触れられている重要な論点については，専門の部分でくわしく解説が施されていて堅実である。おそらく冒頭の自負の念によるのであろうが，西村勝三の活動については，耐火煉瓦の西村勝三というえがきかたにとどまらずもう少し記述をふくらませてもよかったのではないだろうか。製靴と耐火煉瓦という一見無関係な事業分野が西村においてどのように統一されていったのかといったテーマを追求することにあり，明治の経営者像の一端に触れることができたはずだからである。資料についても，青木関係のそれに較べて西村関係の資料の収録が少ないことが惜しまれる。

：Ａ４判１０４０ページ（年表８２ページ），索引なし，参考文献目録あり。

8. 十八銀行百年史編集委員会編『百年の歩み』 昭和53年3月刊

十八銀行は明治3年創立の松田永見商社に端を発し，同10年に第十八国立銀行として創立され，明治30年に十八銀行となって以来，今日まで連綿とつづく，由緒ある長崎所在の銀行である。本書では，国立銀行として設立されたときから数えて百年の歩みがまとめられている。

最近の地方銀行の行史には，地方金融史として水準の高いものが目立つが，本書もその一つとして，日本経済や長崎県産業・金融の動向と関連させつつ十八銀行の経営の推移と特徴を明らかにしており，読みごたえのある社史となっている。安藤良雄東大教授（当時）の監修を受けただけあって，営業関係の計数もよく収録されており，貸出政策や店舗政策など銀行経営上重要な問題も史料に基づいた記述がなされている。

しかし，時代がすすむにつれて記述が表面的・形式的となり，金融恐慌，朝鮮支店譲渡，空襲，原爆被災などについては行員のなまなましい回想によってビビッドな描写がなされているが，戦後になるとこうした記述もなくなる。長崎地方の産業・経済・金融についての説明すらほとんどされておらず，ほとんど読みごたえがない。なお，全体を通じて日本の金融史の記述についていくつかの誤りが散見されることも気になるところである。

・A5判585ページ（年表21ページ），索引，参考文献目録なし。

9. 中国電力株式会社中国地方電気事業史編纂委員会編『中国地方電気事業史』昭和４９年１２月刊

本書は，２人の経済史研究者の執筆によって，企画されてから１０年の年月をかけて完成した大部の力作である。全体を３編に分け，第１編を中国地方の電気事業，第２編を中国電力株式会社とし，第３編を資料編にあてている。第１編では，現在の中国電力の営業地域となっている中国地方の各地におこった電気事業が第二次大戦中の国家管理を経て，戦後の電気事業再編成によって中国電力発足にいたるまでに，どのように消長したかを述べている点に特長がある。戦前の電気事業の発展史は群雄割拠の歴史であり，合併統合の歴史であり，地域の風土や地勢，産業の特殊性と分ちがたく結びついていた。そういう意味で第１編は当然ながら面白いだけでなく，従来の電力産業史が東京電燈をはじめとする五大電力中心であったのに対し，こうした地方の電気事業の丹念な掘起しは高く評価してよい。本書編集の目的である中国地方に電気事業が創業されていらいの「およそ８０年間にわたる足跡をつまびらかにし，永く後世に残す」ということは十分にはたされている。第２編の中国電力の社史の部分は，部門別にわけて叙述してある。歴史が新しいということもあって，網羅的で平板な感じをまぬがれられないのはやむをえないことかもしれない。

・Ａ４判１２０２ページ（資料編１７４ページ），索引なし。

10. 電気化学工業株式会社６０年史編集委員会編『デンカ６０年史』　昭和５２年１０月刊

本書は，現況，沿革，部門，資料という構成で「現況」に重点を置きながら，電気化学の活動全般に亘って記述を行きとどかせる　但し，財務の側面は触れられる程度が少ない　という方針で編集されているように思われる。しかし，このことは同社の経営が多角化し，また経営環境の変化の速度が増すにつれて記述すべき事項の加速度的な増加をもたらし，その結果，多くの事項が盛り込まれてはいるものの，立ちいった解説や分析がないため，内容的にはやや物足らないものに終っている。例えば，クロロプレンの研究開発については

これは自他共に許すクリーンヒットであったといえようが　これに先行したアクリロニトリルに関する研究で得た知見が有効であったと説明されているが，それがどのように役立ったのか，またアクリロニトリルの研究開発の意図や過程について記述は見当らないというようにである。

同社は，社史の刊行にはきわめて熱心な企業であり，すでに数冊の社史を刊行しているが，重点の置き方に若干の差はあるものの，いずれも基本的には『３５年史』以来のスタイルが継承されている。しかし，５～１０年に一冊という頻度で社史を刊行するのであれば，各社史にもっと個性をもたせる工夫をしても良いのではあるまいか。歴史のある化学工業の名門企業なのだから，素材には事欠くことはないと思うのである。

・Ａ４判５９２ページ（付属資料１０３ページ，年表３７ページ），索引なし，
・参考文献目録あり。

11. 東京急行電鉄株式会社社史編集事務局編『東京急行電鉄五十年史』 昭和48年4月刊

本書は，目蒲電鉄を前身として昭和17年に成立した東急電鉄が，戦後おびただしい分野への進出を果して今日の東急グループを形成するに至るまでの全過程を所収しており，800ページにおよぶ大著となっている。戦前の東急系私鉄各社の創業と発展，田園都市事業，東横百貨店の沿革から，戦後，映画・車輛・不動産・観光などへと多角化してゆく過程，さらに昭和40年代における諸事業の近代化や拡充までもが，すべて包括されていて，東急の歴史についてはほとんど網羅的な記述がなされているといってよい。この意味では，東急の研究にとって有用であろう。こうした電鉄を中心とした多角的事業体の社史が乏しいだけに貴重ともいえる。

しかし，少し視点をかえてみると，難点も目立つ。たとえば，価格政策，需要創出，資金調達，管理問題といった諸局面は，いずれも企業にとって重要な経営問題であるが，これらのうち本書で十分な記述のなされているのは，需要創出の面だけである。価格政策については，ほとんどまとまった説明はみられないし，資金調達の面では初期の矢野恒太の役割と，戦後の増資，社債発行についての記述はあるものの，貸借対照表がおさめられていないため多くを知ることは困難である。戦略や組織もダイナミックに描けていない。全体として経営についての資料が乏しく，経済史・経営史の資料的価値の少いのが残念である。

・A4判1246ページ（付属資料145ページ，年表55ページ），索引，参考文献目録あり。

12. 飛島建設株式会社社史編纂室編『飛島建設社史』(上)(下)　昭和48年3月刊

本書は，飛島建設の企業形態の変遷に即した時代区分のもとに，(1)その時代に関する一般事項の解説と，(2)その時代における主要な工事の概要を解説する二つの章を組み合わせるという形で構成された社史である。(2)の主要工事の概要の部分では，きわめて多数の工事について，時期，場所，契約金額，主たる担当責任者および工事内容について特筆に値する事項が説明されているので，同社の発展過程を知るための貴重な素材を提供してくれる。しかし，資料の提供という意味での努力は多としなければならないとしても，上下二巻の大冊を読み通すためには，かなりの努力を要するのも事実である。この傾向は，(1)の部分の解説が時として，極めて一般的な経済的・社会的状況の説明にとどまっていたり，重要な論点が提示されていても，(2)の解説に充分に展開されていないことがあるため，一層強まっているように思われる。例えば，戦前・戦後の土木工事を比較した場合，戦後の一つの特色は機械化の進展をみたことであり，それは占領軍関係の工事をきっかけに出発したという興味深い指摘があっても，同社における機械の導入過程を知るためには，各工事の中から一つ一つひろいあげて整理をしてみないと全体像が明確にならない。この種の問題については，何らかの手法の工夫が望まれよう。

・B5判1632ページ(年表35ページ)，索引あり，参考文献目録なし。

13. 日産自動車株式会社社史編纂委員会編『日産自動車社史 1964－1973』 昭和50年12月刊

本社史は，日産自動車の創立40周年を記念して，表題に付記されている通り1964年から1973年に至る10年間の同社の歴史を記述したものである。周知の通り，この10年間は，日本経済の開放体制への移行，自動車の安全公害問題，反自動車論の高まり，国内自動車市場の成熟等自動車メーカーをめぐる環境には厳しいものがあったが，本史は，これらの「時代の変化，企業経営環境の変化を軸として，当社がこれらの諸課題とどのように取り組み企業経営を展開してきたかを記録する」ことを執筆の基本方針としている。

編集の基本方針は明確であり，この方針が実際の執筆過程にも貫ぬかれていることが一読して明らかである。欲をいえば，単に10年間に対象を限定せず，創立以来40年の歴史全体について同じ姿勢での記述がなされていたならば，本書の価値がより高まったのではないだろうかと惜しまれる。

また，技術開発・生産体制・市場開拓・販売体制に加えて部品購買体制について立入った記述が行なわれていること，合併会社プリンス自動車の前史が取上げられていることも本書に広がりを与えている。

但し，プリンスの前身である中島飛行機，立川飛行機の歴史は，多くの論者の関心のあるところだがこれについての記述は平板で資料不足の感を免れ難い。また，記述対象の広がりということでいえば，財務問題（企業金融，社外投資，関係会社管理等）についての記述も欲しいところである。

・A4判579ページ（付属資料147ページ，年表22ページ），索引，参考文献目録あり。

14. 日本紙パルプ商事株式会社『百三十年史』　昭和５０年１２月刊

幕末の京都に，三井の暖簾わけで和紙専門の越三商店を開いた中井三平は，明治初年いちはやく国産の洋紙を扱い，中井商店と改称して洋紙問屋へ脱皮した。その後，明治１５年に王子製紙の販売店となってからの１００年近くは，よかれあしかれ王子製紙と歩みを共にして，紙の専門商社としては業界トップの地位を築き上げ，今日に至っている。本社史においては，当然のことながら，この王子製紙と中井商店との関係が記述の中心部分を占めている。とくに，三井傘下にはいった王子製紙と樺太工業を設立した大川平三郎との対立が中井商店の首脳の間にも対立をもたらし，ついには大阪・京都各支店を中心に別会社が設立された事件についても卒直に述べられているなど，全体にわたる客観的な視点は本書の大きなメリットであろう。

しかし，なんといっても，時期区分なしに一般経済・紙業界の動向と中井商店の事業活動を４１章に分けた編別構成は，あまりに羅列的で大きな流れを把みにくくしている。さらに，製紙業の動向→王子製紙の動向→中井商店といった縦糸の部分にのみ視点が固定されていて，紙の流通機構のなかでの中井商店の地位，同業他社との係わりあいなど緯糸が弱い点も，本書の記述を著しく平板なものにしている。また，関東大震災と第二次大戦とで多くの資料を焼失したと序文で断っているから，これは無理な注文であるかもしれないが，基礎的な経営上の計数がほとんどないことは資料的価値を著しく低からしめていて残念である。

・Ｂ５判５５８ページ（年表２９ページ），索引なし，参考文献リストあり。

15. 野村証券５０年史編纂委員会編『野村証券株式会社五十年史』昭和５１年９月刊

「編集後記」によると，本社史は「単なる野村証券という一企業の年史を超え，資料的価値をもった証券市場史を作成し，これを社会に送ることが基本方針にされた」という。総ページ数１２００ページに近い大冊であり，証券会社の社史としてはもっとも詳細なもののひとつで，『山一証券史』と双璧をなすものといってよい。明治維新以降の日本経済（とくに金融・財政）の発展とからませて，株式・社債・公債の発行，流通の推移を述べ，以上との関連で野村証券（その前身企業および関係会社を含む）の経営の流れを述べるというオーソドックスな記述方法をとっている。すでに２５年史や４０年史を刊行されているので，重点は第二次大戦後に置かれ，この部分が全体の三分の二の紙数を占めている。戦前の社債シンジケートの仕組み，戦後の投資信託再発足，昭和４０年証券不況とその後の証券業改革など，重要問題についての興味深い叙述もあり，証券市場の歴史を理解するのに有効である。しかし，同社の経営陣の回想なども点綴されてはいるが，野村証券それ自体の経営史には余り紙数が割かれていない。四社相場とか，推奨販売方式とか，「ノルマ証券」とか，かってジャーナリズムの問題となった野村証券の経営の一側面はこの社史からはうかがい知ることはできない。社内史料の活用とディスクロージャーの不足は否めないのである。

・Ａ４判１１７６ページ（資料１８９ページ，年表１３８ページ），索引あり，参考文献目録なし。

16. 白鶴酒造株式会社社史編纂室山片平右衛門編『白鶴二百三十年の歩み』および『白鶴簡尾集』昭和５２年１０月刊

本書は，「社史」といっても，かなりユニークな性格をもつ貴重な文献である。というのは第一に，柚木父子という二代の経済史家の手になる４０年にわたる研究成果であることであり，第二には，白鶴といっても，嘉納家を中心とした江戸期からの灘酒の２世紀半の経済史的研究業績であることである。さすがに，丹念な一次資料の克明な分析と考証による研究蓄積を基礎にしただけに，江戸時代いらいの灘酒の発展の全貌が解明されており，学界への寄与も非常に大きい。

２５０年間の歴史は，個人経営時代（江戸時代から明治２９年），合名会社時代（明治３０年から昭和２２年），株式会社時代（昭和２２年以降）と企業形態によって，三つの時期にわかれており，とくに江戸時代から明治・大正時代までの約３００ページの記述は，帳簿の分析によって事業（嘉納家・嘉納合名）の財務の詳細まで明らかにされている。

ただし，本書にも問題がないわけではない。とくに明治以降の販売組織やマーケティング対策，製品や技術の改良の過程，労務者の管理など，一言でいって経営史的な側面が軽視されていること，そして株式会社時代の記述が手薄で首尾一貫しないことなど，本書を通読して弱点に感じられる。もっとも本史の巻末に関係者の人物と活動が豊富に記載され，さらに別巻に歴史，風土，技術，製品，宣伝などについて趣向をこらした内容が盛り込まれており，２３０年史としては，その努力と成果は十分に評価できる。

・Ｂ５判本史５７５ページ，付編３３７ページ，索引なし。

17. 株式会社阪急百貨店社史編集委員会編『株式会社阪急百貨店二十五年史』昭和５１年９月刊

大正１４年，阪急電鉄が梅田駅に直営で開いた食堂とマーケットが阪急百貨店の発端である。その後，昭和４年に，わが国で最初のターミナル・デパートを開業し，戦後の２２年に電鉄会社から分離独立した。「二十五年史」とは分離独立後からの年月であるが，同社はながい「前史」をもっているのであり，本社史も，その記述に多くのページを割いている。歴史の古い百貨店は，ほとんど江戸時代以来の呉服店から発展してきたのであるが，そうした伝統のある百貨店に伍しながら，ユニークな経営を続けてきた同社のあゆみが，「前史」として興味深く描かれている。この「前史」に比べて「本史」はやや平板に感じられる。

「資料編」では，財務の数字がやや物足りないが，支店や関連会社の小史まで附して，なかなか行きとどいている。また，昭和４年以来の営業催物記録が載せられてあり，これも商品史や風俗史からみれば興味深い記録といえよう。盛り沢山の社史である。

・Ｂ５判９２１ページ（年表６７ページ），索引・参考文献目録なし。

18. 富士電機製造株式会社編『富士電機社史Ⅱ（1857－1973）』 昭和49年7月刊

社内の人びとのみによって執筆された社史としては，一つの典型的な社史といえる。

全体の構成は，大きく「沿革」「技術・製品」「資料」の三部門に分けられている。1757年に刊行された社史の続編という性質をこの社史はもっているため，一応，創業期から説き起されているものの，1956年までは既刊の社史の要約である。今回の社史は，それ故，1957年から73年までの比較的短い期間を扱っているため，年々の経営動向についての記述は，概して詳細である。本社史の特徴は，全体の構成からも知られる通り，「技術・製品」に関する叙述がとくに詳しい点に求められる。

文章は，読みにくくないが，平板的で，盛上りに乏しい。内容的には，先述の通り「技術・製品」については詳しいが，人や組織の動向が扱かわれることが少なく，やや詳しい叙述は，「資料」の中で形式的に述べられているにとどまる。現在の巨大化した組織の動向を，経営主体に力点を置いて扱うことはいろいろの差し障りが生じ易いので，結局，差し障りの少ない「技術・製品」を中心とし，組織や人に関しては，公式的な組織や制度と，量的な推移の形で扱かわざるをえなかったものと推測される。また，社内の人びとだけによって執筆されたことと，恐らく関連すると思われるが，外社会との関連が，ほとんど触れられていない。

- B5判410ページ（年表16ページ，付属資料130ページ），索引なし，参考文献目録なし。

19. 北越製紙株式会社刊『北越製紙七十年史』昭和５２年６月刊

本書はあとがきにきわめて短期間に編集されたと書かれているように，５０年史と６０年史の草稿をもとにして社内スタッフによってまとめられた平均的社史ということが出来よう。脚注と写真を上段にまとめたような編集上の工夫の跡が見られないわけではないが，第１次選考に残ったものの中では，更に推薦する理由にとぼしいものである。

問題点を指摘すれば，第１に，出版費用と係わりがあるのか，図表が殆ど利用されず逆に本文中に数多くの数字が出てくることである。若しこれが費用の節約のためでなかったら理解に苦しむ。第２に，書物の構成に若干問題がありそうである。かくして製紙業の技術革新ひとつを取り上げても，記述があちこちに散らばっているために，全体としての理解を困難にしている。同じことは労務管理についても言える。当社は度々経営危機に見舞われているが，この「危機」についてもう一歩深い分析を行えたら，本書の持つ意味は幾倍も増したであろうと惜しまれる。

以上の問題点にもかかわらず，ともかく必ずしも順風満帆とは言えなかった当社が，漸く２５年史についで７０年史を刊行するに至った努力は認められてよい。

・Ｂ５判４５３ページ（年表２７ページ），索引なし，参考文献目録なし。

20. 北陸銀行調査部百年史編集班編『創業百年史』昭和53年3月刊

金沢・富山などに多くの前身銀行をもち，北陸地方産業の発展に密着した歴史をもつ同行の百年史であるだけに，この点にとくに配慮がなされた意欲作である。すなわち，前身銀行の歴史と北陸地方産業との関係に叙述の重点を置き，本編では前身銀行史を詳述するとともに別に産業編を設けて海運・売薬・農業・繊維・電力など北陸に関係の深い産業の歴史を産業金融史的視角でまとめている。各編とも資料収集に多大の努力を傾け，北陸三県の新聞記事など十分に活用されているし，また地方史，統計書，学術書なども利用して詳細かつ客観的な記述が心掛けられている。北陸と北海道との関係や，北前船資本・売薬資本と銀行業との関係など，これまでの経営史・銀行史で空白に近い部分が埋められているところも少くない。関係者のヒアリングやエピソードも適宜採録されていて，本書を読みやすいものとしている。

ただ，同行の歴史と，地方産業および地方金融の歴史とが必ずしも有機的に関連づけられているとはいい難いのが残念である。また，創立前史の時期区分がやや機械的にすぎる点，預貸金の内容構成表など計数関係資料の採録が断片的で一貫性に欠ける点，北陸繊維産業史の記述に参照すべき重要文献・資料がいくつか洩れている点なども惜しまれる。

・B5判1209ページ（年表36ページ），索引なし，参考文献目録あり。

21. 雪印乳業史編纂委員会編『雪印乳業史』（第4巻）昭和50年5月刊

当社は第二大戦後いち早く社史の定期的刊行という雄大で希有な計画を実行し来ったパイオニア的企業であった。第1巻が刊行をみたのは昭和35年であったが，その後昭和34～41年を論じた第3巻と巻を重ね，昭和50年に第4巻が刊行された。同書の対象となったのは昭和41年から49年に至る時期である。

大方の社史の評者の一致した意見は，最も新しい10年なり20年なりの記述が一般に羅列的で魅力に乏しいということである。この点で，常に最近の10年間を論ずること自体を狙った本書は，他の社史には見られない困難な問題と取り組まねばならなかったことが予想されるのであり，ともかく刊行を続けた意欲は何にも増して特筆に値するものと言えよう。

以上のような事情から，言わば未だ歴史に昇華しない過去を取扱った本書は，他の社史と全く異なった構成から成り立っている。それは小項目方式とも言えるもので，ほぼクロノロジカルに2章を51項目に分けて，当社の僅か8年間の歩みが詳述されている。この点で資料集的意味あいを持つと言ってもよいであろう。全体の構成にもう一工夫欲しかったと言うのが評者の感想であるが，歴史的評価の定まらない身近な過去を，このように丹念に記録することは，経営の幹部候補生ばかりか研究者にも価値の大きいことは否定出来ない。誠に異色の努力には敬意を表せざるを得ない。

・B5判738ページ（年表57ページ），索引なし。

22. ライオン歯磨株式会社社史編纂委員会編『ライオン歯磨八十年史』昭和448年10月刊

この社史の執筆は，全面的に社外の経営評論家および凸版印刷の専属ライターに依存しており，こうした外部の人に依存した場合に生ずる長所と短所がもっとも顕著にあらわれている社史である。

社史の構成は，本文が序章ほか九章とむすびの全十一章から成り立っており，それに付録として関係資料や年表が付されている。序章は，わが国における歯磨と歯刷子の歴史を扱っており，むすびを除く他の九章は，時代を追って経営活動の推移が述べられている。むすびは，将来展望を扱っている。

この社史の長所は，非常に面白く読めること，編集上のアイデアに富んでいること（たとえば，本文は，各頁とも約三分の二が文章で他の三分の一は写真やグラフなどに当てられていること，また年表にも写真や図表をふんだんに盛り込んでいることなど），各時期への頁数の配分および，その中での経営諸活動への枚数の割当てがバランスよく行なわれていること，にある。

短所としては，宣伝臭が強く，きれいごとに過ぎるという記述上の問題が指摘できる。経営活動の扱い方が，製品と販売（広告・宣伝）中心で，財務の問題などはほとんど扱われていない。全般的にいって，企業経営の実態への切り込みの浅さが目立つ。企業外の人びとへのＰＲを主目的とした社史としてみるならば，その目的は十分に果しうる社史である。

- Ａ４判５３５ページ（年表５８ページ），索引なし，参考文献編集後記にあり。

【特別賞候補】

1. 飯田信用金庫発行『伊那谷の歴史の中に ― 飯田信用金庫五十周年記念誌』昭和51年11月刊

長野県所在の飯田信用金庫の歴史であるが，理事長の「ご挨拶」によると「金庫史の編纂に当りまして只金庫の平面的な記録のみにとどめず飯田下伊那地方の社会経済の主要な歴史を顧みながら，その中で金庫がどのようにして生まれ，歩み続けてきたかを綴ることにいたしました」とある。この方針のもとに，太古から現代に至る伊那地方社会経済史とからませて，飯田信用金庫の歴史が叙述されている。ひとつの読物として，飯田を中心とする社会経済史は興味をひくものがあるが，たびたびの大火で資料が失なわれたせいか，飯田信用金庫そのものの経営の歴史はやや手薄な感がぬぐえない。「信和銀行の話」や「赤穂信金との合併話」などエピソードも挿入されているが，基本的な貸借対照表や損益計算書の計数が簡略化され，貸出先の業種別構成や余裕金運用先などの記述が時期によって欠けている。信用金庫の業務について断片的なイメージしか得られない点は惜しむべきで，同業他社の社史と比較すれば，経営の動きについての記述は劣るものでないが，やや伊那地方社会経済史に重点を置きすぎたきらいがある。とはいえ，個別信用金庫史としては，地域史との関連でとらえ，経営者の経歴・活動にも紙数を割くなど努力がみられ，読みやすさに留意されている。

B5判578ページ（年表16ページ），索引なし。

2. 王子製紙山林事業史編集委員会編『王子製紙山林事業史』昭和51年6月刊

本書は，旧王子系三社によって組織された編集委員会（委員長・小林準一郎元王子製紙副社長）によって，戦後解体するまでの王子製紙の山林事業の歴史をまとめたものである。製紙業にとって山林事業とは，調査から伐木・搬出・造材・運送・荷揭げ，さらには造林までも含む原料調達活動なのであり，工場の生産過程と同様に重要な機能なのである。

王子製紙の山林事業は，明治20年代天竜川流域に工場を建設した時期から着手され，明治末年苫小牧工場の操業にともなって北海道で，ついで大正時代においては樺太においても本格的に展開された。内地では，昭和8年の王子，富士，樺太3社の合併ののちに，本格的な山林開発と取り組むことになり，戦争中は朝鮮，満州にも拡大した。

こうして王子製紙の山林事業は，わが国の森林開発技術にいくつかの画期を描きながら発展して来たのであったが，もとより戦後は海外の事業にすべて消滅し，国内の社有林は3社に分割されて現在にいたっている。

本書は，多くの資料を駆使した客観性の高いものであるだけでなく，方針や政策等の決定，各営林局の林業政策，山林労働についてもかなり立入って記述しており，既刊の「王子製紙社史」（全5巻）において手薄だったとされる山林事業の部分を十分に補う内容を備えている。ただ，なぜか農林省刊行の林政史関係の諸文献や林業史についての学界の研究にいっさい触れられていないのが物足りないが，一社の部門史としてすぐれたものの一つであることに変りはない。

・B5判595ページ（年表43ページ），索引なし。

3. 京都信用金庫発行『ここに生れここに育って五十年　京都信用金庫の歩み —』昭和48年9月刊

京都信用金庫は，大正12年9月，京都株式取引所の取引員によって，同所取引員のための金融機関「京都繁栄信用組合」として設立された。第2次大戦中の日本証券取引所法による短期精算取引廃止は，取引員のための金融機関という性格を改めた。戦後（昭和26年）の信用金庫法施行によって京都信用金庫として再発足し，その後，京都の中小企業を主な取引先とするコミュニティ・バンクとして全国信用金庫界でも上位の資金量を持ち，ユニークな発展をみている。本社史は，同金庫の経営者のユニークな理念を反映し，次ぎの4分冊をワンセットとしている。

Ⅰ．ここに生れここに育って五十年（370ページ）

Ⅱ．別冊・クロニクル（177ページ）

Ⅲ．京都庶民生涯史（611ページ，索引あり）

Ⅳ．コミュニティ・バンク論（363ページ）

つまり，Ⅰが本史，Ⅱが年表・統計など，Ⅲは地域史，Ⅳは信用金庫の多角的ヴィジョン論である。Ⅲ・Ⅳはそれぞれ専門家による執筆であり，しかも読みやすく，それ自体として興味深いが，本史のⅠについていえば，信用組合一般の歴史にも触れているが，同金庫の前身史はあまり詳細でなく，戦後については経営者の理念および経営発展の表面のみ描いた感じがする。読みやすさとユニークな構成に苦心が見られるが，本史はもっと史料に即した詳細な記述が欲しかったと思う。

・A5判，4分冊

4. 株式会社義済堂発行『義済堂百年史』昭和４９年１２月刊

義済堂は，岩国藩が幕末期に藩営マニュファクチュアとして経営した節倹局（のちに撫育局と改称）につらなる系譜をもつ。士族授産事業として明治６年に創立，明治３２年に合資会社に，大正８年に株式会社に改組され，現在資本金５０００万円の織布・染色・整理を主要業務としている。士族授産事業として，発足以来１００年もの歴史をもつ企業はあまり例がなく，まずこの点で興味ある社史といえる。１００年の歴史を持ちながら，資料の保存がよく，また広く資料をさがされたためか，生産・経営組織・財務などの諸問題も，資料に基いた記述がなされており，義済堂の直面したさまざまな経営上の問題（たとえば，明治２３年の自営制度の促進，明治２４年の経営方針の転換，合資会社の経緯など）も，当時の経営者の苦心とともに述べられている。昭和初期の記述には物足りない感があるが，全体としては地方史研究の成果も採り入れられていて，学問的にも批判に耐えうるものとなっている。

貸借対照表・損益計算書など計数もよく採録されており，年表もよくまとめられていて，資料的な実証性・客観性がすぐれている。地方の，どちらかといえば小規模の企業の社史としては，出色のものといってよい。希望としては，義済堂関係の史料集を刊行して頂けるならば，経営史研究に大いに稗益するものと思われる。

・Ｂ５判４０１ページ（年表１９ページ），索引なし。

5. 三和銀行行史編纂室『三和銀行の歴史』昭和４９年１２月刊

銀行史の多くは行内で作成されているが，この『三和銀行の歴史』は，『三井銀行１００年のあゆみ』とともに，外部執筆者の手になった点で新しいタイプの銀行史といえよう。本書の場合は，執筆者はベテラン経済記者であり，執筆者の選択が本書のメリットとデメリットを，ともに決定した感がある。

まずメリットとしては，全編を通して非常に読みやすいことがあげられる。とくに戦後，それも昭和４０年以後の１０年間に全体の４分の１を割いて詳しい記述をしていながら，決して無味乾燥な業務案内に終っていないところは，みごとな筆力である。また，三和銀行創立前史にも多少及んでいる点は，以前出版された『三和銀行史』（２９年３月）に比べて一歩前進であろう。

他方，デメリットとしては基礎的計数のまったく不備である点が最大のものである。本文の理解を助けるためにも，前身三銀行と合併後の諸統計を収録してほしかった。また，せっかく創立前史に筆を及ぼしておきながら，この部分の記述が概観を伝えることにとどまっている点は，かえすがえすも残念である。『三和銀行史』で三銀行の記述が欠落していたため，今回の社史に最も期待されたことは，この欠落を埋めることであった。鴻之池銀行，山口銀行，三十四銀行と，いずれも関西財界にあっては住友に次ぐ重要な地位を占めていただけに，今後これら三行の歴史を掘り下げることを課題としてほしい。

・Ａ５判６４４ページ（年表４１ページ），索引・参考文献目録なし。

6. 塩野義製薬株式会社編『シオノギ百年』昭和53年3月刊

この社史は，比較的小冊子で，その中に，前史を含めれば百数十年の歴史的経過が扱われているため，史実の記述が粗雑になることは避け難い。前史の叙述，すなわち大阪道修町の薬種商に関する部分の記述に当っては，宮本又次教授の助力を得ているが，その他はほぼ社内の編集委員会の人びとによって執筆されている。

文章はよくこなれており，内容的には，初代および二代の義三郎の伝記的記事が大な比重を占めており，失敗談あり成功談ありで，軽い読み物としては，とくに関心をもたない人びとも読了させてしまうだけの魅力をもった社史である。

反面，資料出所が不鮮明な箇所が少なくないこと，とくに統計的資料の裏付けに乏しいことから，研究者が研究上利用する上ではその価値が低い。また，製薬会社が急成長したのは比較的近年のことであるから，あるいはその方が史実に近いのかも知れないが，あまりにも義三郎伝の色彩が強すぎるように思われる。ただ，社の内外の一般大衆に広くPRするための社史としてはきわめて優れたものといえる。

・A5判533ページ（年表28ページ），索引，参考文献目録なし。

7. 新宿高野１００年史編集委員会編『高野１００年史・創業９０年の歩み』戦前編・戦後編　昭和５０年刊

企業と地域社会との関係が，東京という都市市場の発展史を中心にして興味深く記述されており，その意味で極めてユニークな社史である。精米業，繭，生糸仲買，古道具商，果物商，フルーツ商といった発展，それにファッション商，スーパーマーケットへの多角化など，高野家の事業の歴史が東京経済史とでも言うべきものとの密接な関連のもとに描かれており，東京，とくに新宿の歴史に関心をもつものにとっても好個の読物になっている。また高野家の人びとの苦闘のあとも，従業員の働きぶりも生き生きと書かれており，経営志気の向上に貢献するという社史の目的をも十分果しうるであろう。ただ，企業の金融面についての記述が乏しく，また全体として記述内容がバラエティに富みすぎている。企業経営の基本的諸問題をもう少し掘り下げ，全体として論述の構成を整理すれば，第一級の社史になりうる内容と編集・執筆の姿勢をもっている。

・Ｂ５判１９９ページ，２７５ページ，年表別紙，索引なし。

8. 第一勧業銀行『第一銀行小史』── 九十八年の歩み　昭和48年刊

手堅く要を得た行史であり，社史としてのみでなく，日本金融史，経済史の読物としてもよくまとまっている。また，合本組織であるがゆえにこそ高い経営倫理を要求した渋沢の思想，銀行実務研修機関としての第一銀行，同行における韓国支店の意義，金融と財政を対等にした国債引受組合，大正期における海運・造船関係事業への金融，金融恐慌後の預金者意識の変化など行論の各所に興味ある事実が指摘されている。ただ，経営史と経済史がバランスよく統合されていることは，経営史として銀行経営内部の諸問題への立入った記述が手薄になる結果を招いており，また何よりも貸付先企業との関係，それへの融資状況などが充分記述されていないことには，社史・経営史としてみた場合不満が残らざるを得ない。

・B6判283ページ。

9. 月島機械株式会社編『創造への年輪 ―月島機械株式会社７０年の歩み ―』昭和５２年６月刊

本書は，既刊の５０年史以降の２０年に重点を置いて書かれた社史である。この２０年間は同社にとっては，単体機器メーカーからエンジニアリングを軸とする総合プラントメーカーへの成長を目指した時期であったというのが基本的なテーマ設定である。そして，この間に導入した外国技術を消化・吸収して技術力を高め，石油化学工業関連装置，水処理装置，排煙脱硫装置，隔膜法電解槽などの諸分野へと，市場の動向に対応しつつ活動分野を拡大したことが細かく解説されている。しかし，市場の動向，つまり化学工場の諸分野や最近の地方公共団体からの需要の動きについての説明に較べると，同業他社との競争関係の推移についての説明が手薄である。同様の傾向は５０年史についても認められるが，この点を抜きにしては企業の活動の重要な部分が脱落することになるので惜しいと思う。

なお，前半については，創業者の個人伝記風にまとめられた最初の部分が，非常に読み易い文章で良くまとめられているのが印象的であった。

・Ａ５判３９６ページ（年表６５ページ），索引なし。

10. 東京瓦斯株式会社発行『東京瓦斯九十年史』昭和５１年３月刊

本書は，本編，付編の２冊から成るが，内容的には，創立以来昭和３０年までの約７０年の歴史をエピソードを中心にまとめた部分（第１編明治期，第２編大正期，第３編昭和期）と昭和３０年以降の２０年間の歴史を，いわば業務部門別に記述した部分（第４編現況編及び付編）の二つに分けられる。全体として，エピソードに即した歴史記述，写真や絵をふんだんに使用した視覚に訴える社史というところに本書の特徴があり，特にこの後の点は，本書を親しみ易いものとしている。

しかし，昭和３０年以降の２０年間を一括して現況としてとらえ，それ以前とは異なる手法で記述し，しかも，この２０年間を本編と付編とに分けたために，同社９０年の歩みが読者に直ぐには伝わってこないうらみを残している。９０年間の歴史を一貫してエピソード中心にまとめ，その中に豊富な絵や写真をバランスよく組み込み，最後に現況を現在の会社の姿にしぼって記述したならば，それなりにまとまりのあるユニークな社史になったのではないだろうか。

・Ｂ５判本史５９８ページ（年表４０ページ，索引あり），付編４００ページ。

11.『富士山麓史』（富士急行創立５０周年記念出版）

富士急行の創立５０周年記念刊行物として本書は編さんされた。児玉幸多教授監修のもとに富士山南麓開発史，北麓開発史，そして富士山をめぐる交通発達史にわけて，全体を文化史的にまとめている。古代，中世から明治期現代に至る本格的な叙述である。

同社は，さきに４５周年記念として自然科学的な観点から『富士山総合学術調査報告書』を社外の専門研究者に委嘱して公刊している。本書をあわせて，同社が関与する地域である富士山麓の総合的記述を意図している。

私鉄各社は，いずれも沿線地域の開発をとおして地域社会と密接不可分の関係にあり，事実私鉄関係社史は地域的な記述は盛りこまれているのであるが，同社のように学術的見地や文化史的な観点から本格的に取組んだものは他に例を見ない。企業の社会的な貢献が叫ばれている折からこのような企画は大いに注目されてよい。

同書の後半に「富士急行５０年のあゆみ」と資料編をまとめている。ジャーナリストに委嘱して記述しているが，紙数の関係もあってか割に平ばんな記述に終っている。今少し経営史的な観点を盛り込んでほしいところである。

しかし「富士山とともにあゆむ」同社の社史として見た場合，前半の開発文化史は，同社の社史「前史」としての役割りを存分に果しており，地域社会向けの社史の一つの典型として大いに評価されよう。

・Ａ４判９０１ページ，索引なし，参考文献目録あり。

12. 丸紅株式会社社史編纂室編『丸紅前史』昭和52年3月刊

本社史は，初代伊藤忠兵衛が17歳で近江から大阪へ初めて持下り（出張卸販売）を行なった安政5年から，大建産業㈱が三分割されて丸紅㈱が設立される昭和24年末までの紅忠，㊙伊藤本店，伊藤忠合名会社，丸紅商店，大同貿易，三興，大建産業と変遷する丸紅の90年余に及ぶ「前史」を250ページ余の小冊の中にコンパクトにわかり易く記述したものである。

総合商社が日本経済の中で大きな地位を占め重要な役割を果たしていることについてはあらためていうまでもないが，各商社はこれまでこのような地位・役割にふさわしいレベルの社史を刊行してきたとは必ずしもいい難い。このような点からして，ロッキード事件の打撃にもかかわらず，丸紅がたとえ前史部分に限られているとはいえ，従来の総合商社のそれの水準を上回るレベルの社史を刊行した意欲を買いたい。

複雑な同社の系譜の手際のよい整理，創業者の経営理念や経営組織についての立入った記述，それぞれの時期における同社の主要営業基盤がどこにあったかを読者に伝えようとする配慮も買えるし，巻末の店別取扱高の数字も貴重な資料である。

凍結中の本史の編集が一日も早く再開されることと，本「前史」の基礎となった諸資料が保存され研究者の利用にも供されることを望みたい。

・B5判272ページ（資料56ページ，年表36ページ），索引なし。

13. 三井物産株式会社発行『挑戦と創造 ― 三井物産１００年のあゆみ』昭和５１年７月刊

リーダブルな社史であるという点では，群を抜いていることは認めざるを得ない。しかし，この書物の評価は対象とした読者の層に係わってくる。確かに，一般読者に三井物産を知らしめるには，それなりの効用があるかも知れないが，物産関係者とか商社活動に係わりを持つ者にとり物足りない点も多いであろう。一般に，諸者を意識し過ぎているように感じられると同時に，単なる成功物語に近い記述になっていることが，おしまれる。同社が，軍部のゆき方に終始批判的であったことが強調されている。もちろん，そのような面もあったであろう。しかし，それが楯の一面であったことは何も物産に限ったことではない。他方，本書で最も関心を呼ぶのは，戦後の物産の再興過程であろう。特に，敷しい物産誕生に当っての主導権争いは一読に値する。

・四六判４２２ページ（年表５９ページ），索引なし。

14. 株式会社吉野藤広報室編『吉野藤の百年』昭和５０年１０月刊

株式会社吉野藤は，明治８年，越後の人吉野藤作が上州富岡に創業した呉服店に源流をもつ服飾関係の商社で自社ラベルの製品を持ち，現在は東京に経営の本拠を置いている。同社は，ファッション・ビジネスにチャレンジしてきたと自ら述べているだけに，この社史によってファッションの流行史の一端を垣間みることができ，挿絵・写真も豊富で，見て楽しいものとなっている。各節の表題も，例えば「上っ毛のくにの裏絹の事」，「啓吉どん，死にもの狂いに働くの事」，「藤一郎，社長の職を藤作に譲り，世界一周を試みるの事」という風に，通常の社史にみられない砕けた表現で，本文もノン・フィクション風にまとめられていて読みやすい。カラーを含めて挿絵・図版が多く，レイアウトに工夫されており，こなれた叙述で興味深く読めるのがこの社史の特色である。経営者の理念・従業員の活躍もビビッドに描かれている。しかし他方において，同社の所蔵史料が必ずしも十分に活かされていないように思われる。経営上の数値や年表が簡略化されているのは惜しい。読みやすさを追求したために，記述に脚色めいた箇所も散見され，社史から離れた写真・挿絵もかなりあり，この点一考を要すると思われる。同社史からうかがわれる史料の豊富さを生かして，できれば史料集などを刊行されるならば，学界も稗益されることと思う。

・Ａ４判２４９ページ（年表５ページ），索引，参考文献目録なし。

委員会事務局　財団法人　日本経営史研究所
東京都千代田区平河町2-16-15(北野アームス)
☎ 262-1090・265-2371(内 254・361)

禁・無断転載